



ここまでわかった須玖岡本遺跡

ここまでわかった須玖岡本遺跡

発行：春日市

編集：春日市協働推進部文化財課

〒816-0861 春日市岡本3丁目57番地(奴国の丘歴史資料館)

発行日：令和6年12月1日

1-1 はじめに

古代中国の歴史書には、日本の弥生時代のことが書かれています。『漢書』地理誌には、「楽浪海中に、倭人有り。分かれて百余国と為る。歳時を以て来り献見すと云う。」と記され、紀元前1世紀頃の倭国は100余りの小国に分かれ、一部の国が漢に使いを送っていたことが分かります。

「奴国」が歴史に初めて登場するのは、『後漢書』倭伝です。そこには「建武中元二（西暦57）年、倭奴国、奉貢朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜うに印綬を以てす。」とあります。「倭奴国」の読みは諸説ありますが、「わのなこく」と読む説に従います。ここには光武帝が印綬を賜うとありますが、それが江戸時代の天明四（1784）年に現在の福岡市東区志賀島で発見された「漢委奴国王（かんのわのなこくのおう）」と刻まれた金印と考えられます。

さらに、3世紀の倭国、邪馬台国や卑弥呼のことが記された『魏志』倭人伝にも奴国は登場します。倭人伝には、邪馬台国までの道のりなどが記され、奴国は「（伊都国から）東南奴国に至る百里。官を兕馬觚といい、副を卑奴母離という。二万余戸あり。」とあり、伊都国からの距離、兕馬觚と言う長官と卑奴母離と言う副官がおり、家が2万軒（8～10万人）あったと記されています。

以上のように、奴国は西暦57年には後漢の光武帝から金印を授かった王がおり、8～10万人が住む倭国の有力な国であったことが分かります。奴国については、伊都国（現在の糸島）との位置関係や、古代から現代まで「雥縣」、「那珂郡」、「那津」などの地名がある福岡平野一帯とすることがほぼ定説になっています。

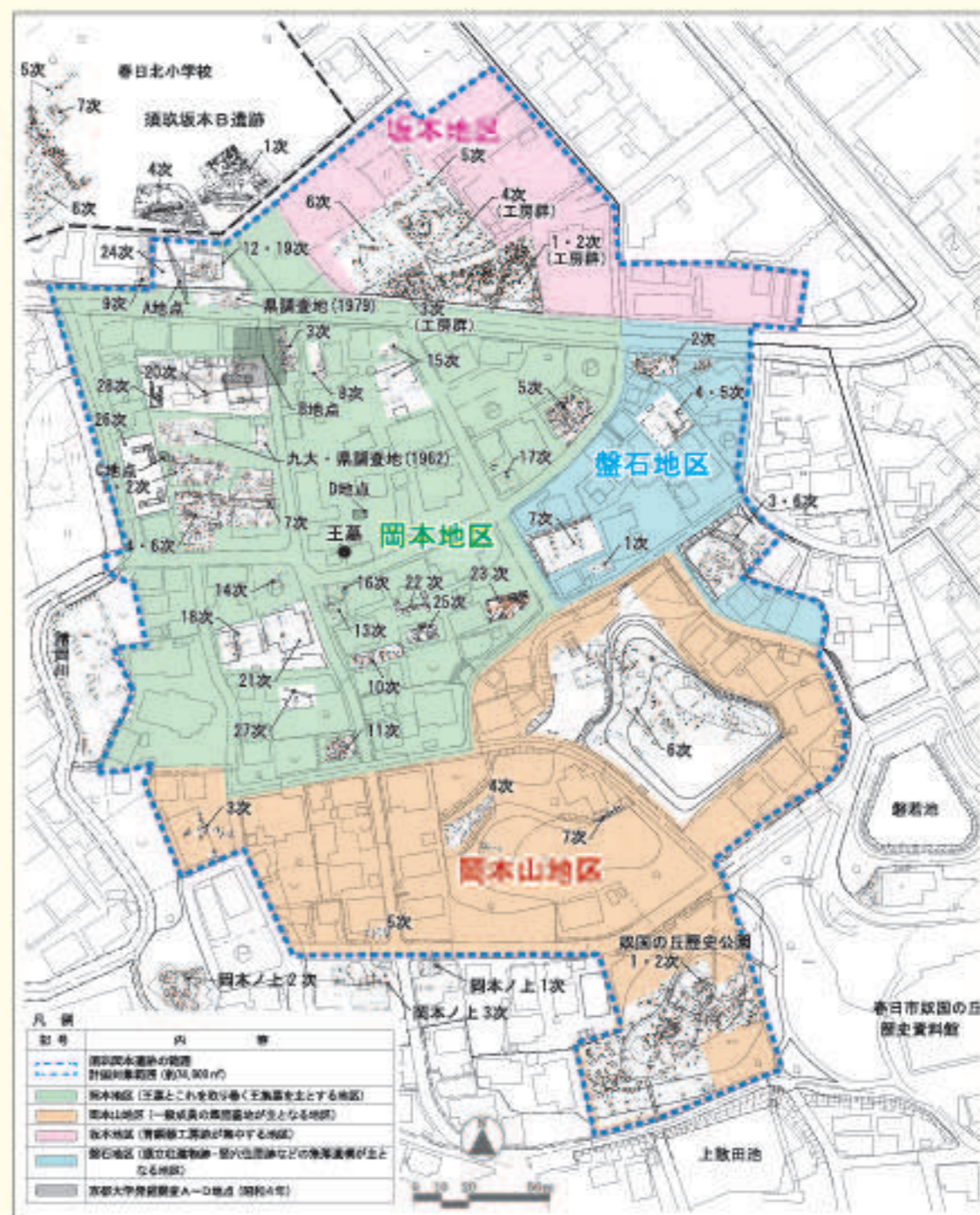
那珂川と御笠川が北流する福岡平野では、弥生時代から古墳時代の遺跡が数多く見つかっています。例えば初期の水田が見つかった福岡市板付遺跡や大

集落である比恵・那珂遺跡群、春日市須玖遺跡群などは全国的にも知られています。これら福岡平野の遺跡は、中国大陸、朝鮮半島から近い立地のため、海外からの文物が多く流入しており、発掘調査でも今までの常識を覆すような発見が相次いでいます。

弥生時代の須玖遺跡群は、春日市中央部にある春日丘陵の北部とその周辺の低地に広がります。集落・工房、墓地、水田などの大小約70の遺跡が途切れることなく続き、その規模は南北2km、東西1km以上に渡る福岡平野最大級の遺跡です。

特に、その中核をなす須玖岡本遺跡は、紀元前1世紀の奴国王の墓や当時の最先端技術である青銅器の工房が数多く確認されています。今回は須玖岡本遺跡について、過去の研究や最新の発掘、研究成果から分かったことを紹介します。

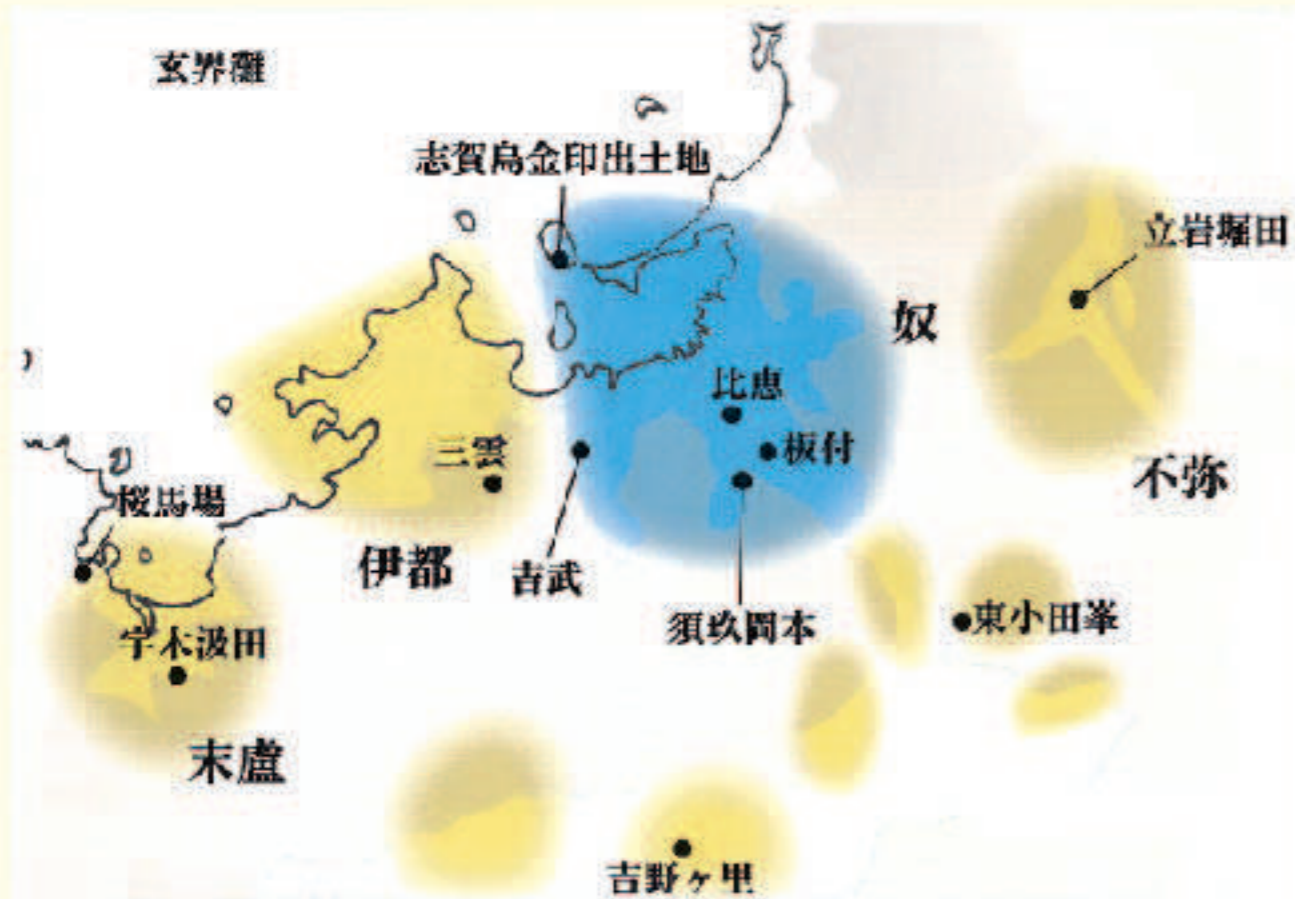
1-2 須玖岡本遺跡



須玖岡本遺跡の4つの地区

「奴国の王都」とも称される須玖遺跡群の中核的な遺跡が須玖岡本遺跡です。須玖岡本遺跡は須玖遺跡群の北部、現在の岡本7丁目周辺に広がる遺跡で、地形や遺跡の種類によって、坂本地区、岡本地区、盤石地区、岡本山地区に分かれています。

坂本地区は「奴国の官営工房」とも称され、たくさんの青銅器をつくったことが分かっています。岡本地区は王墓や王族の墓地です。盤石地区は、集落や工房の存在が考えられます。岡本山地区は一般民衆の墓地が主体の遺跡です。ここでは、須玖岡本遺跡の王墓・王族墓、青銅器生産について紹介します。



奴国の位置

2-1 王墓の発見とその内容

明治32年、現在の春日市岡本7丁目で、若者ら三人が住宅を建築する際に邪魔になった大石を動かし、その下を掘ったところ甕棺の内外から銅鏡や銅剣などが出土しました。その後、祟りを恐れた若者達は、煉瓦でつくった囲み（以下、煉瓦槨とする）の中に出土品などを納め、大石を上に乗せ、元の状態に近い形にしました。

やがて、この出来事を知った研究者達によって煉瓦槨が開けられ、須玖岡本遺跡は全国的に知られることになりましたが、納められた遺物が複数の場所に散逸するきっかけにもなりました。現在までの研究によって王墓は次のような特徴を持っていたことが分かっています。

- ①弥生時代中期末（紀元前1世紀末）の大きな甕棺であった。
- ②甕棺は、人工的に盛土された塚である「墳丘墓」に単独で埋められた。
- ③副葬品は壊れて出土した。銅鏡は280を超える破片で出土し、研究者によって30面前後であったことが明らかにされた。この他にも銅矛などの武器が10本、勾玉、管玉、璧（中国の宝器）などのガラス製品が出土した。
- ④30面前後の銅鏡は、直径20cmを越す大型鏡（草葉文鏡）3面を含む、中型鏡（16cm程度）、小型鏡（10cm以下）があり、大型鏡は中国では王侯クラスの墳墓の副葬品とされる。

これらの内容は同時代の墳墓を圧倒しており、この甕棺の被葬者が前漢の皇帝から王と認められていた可能性があります。年代は紀元前1世紀末なので、西暦57年に金印を下賜された王よりも数世代前の王の墳墓と考えられます。



奴国王埋葬の復元図



草葉文鏡（復元品）

2-2 王族墓の発掘調査と墳丘墓の発見

王墓の北西側には、弥生時代の墓地が広がっており、高い比率で副葬品が出ます。これらの墳墓を王族墓としています。京都帝国大学、九州大学、福岡県、春日市が行った主な調査は次のとおりです。

昭和4年、京都帝国大学文学部考古学教室によりA～D地点が調査されました。B地点では10基の甕棺が調査され、1号甕棺墓からは銅剣が出土しました。D地点は、王墓の煉瓦槨があった場所です。銅鏡片10個とガラス管玉1個が採集されました。

昭和37年には、九州大学と福岡県がE・F地点で合同調査を行いました。E地点では甕棺墓15基、土坑墓3基が確認され、13号甕棺墓から銅戈、14号甕棺墓からガラス小玉38個、15号甕棺墓から銅剣、3号土坑墓から鉄刀、銅釧3個以上、ガラス勾玉が出土しました。

昭和61年以降は、春日市が発掘調査を行い、令和5年までに須玖岡本遺跡岡本地区として大小28ヶ所の調査を行っています。1・2次調査では、甕棺墓27基、土坑墓6基などを検出しました。15号甕棺墓に銅剣、19号甕棺墓にガラス小玉1269個、20号甕棺墓に全長4.86cmの大型ガラス勾玉とガラス小玉824個以上が副葬されていました。

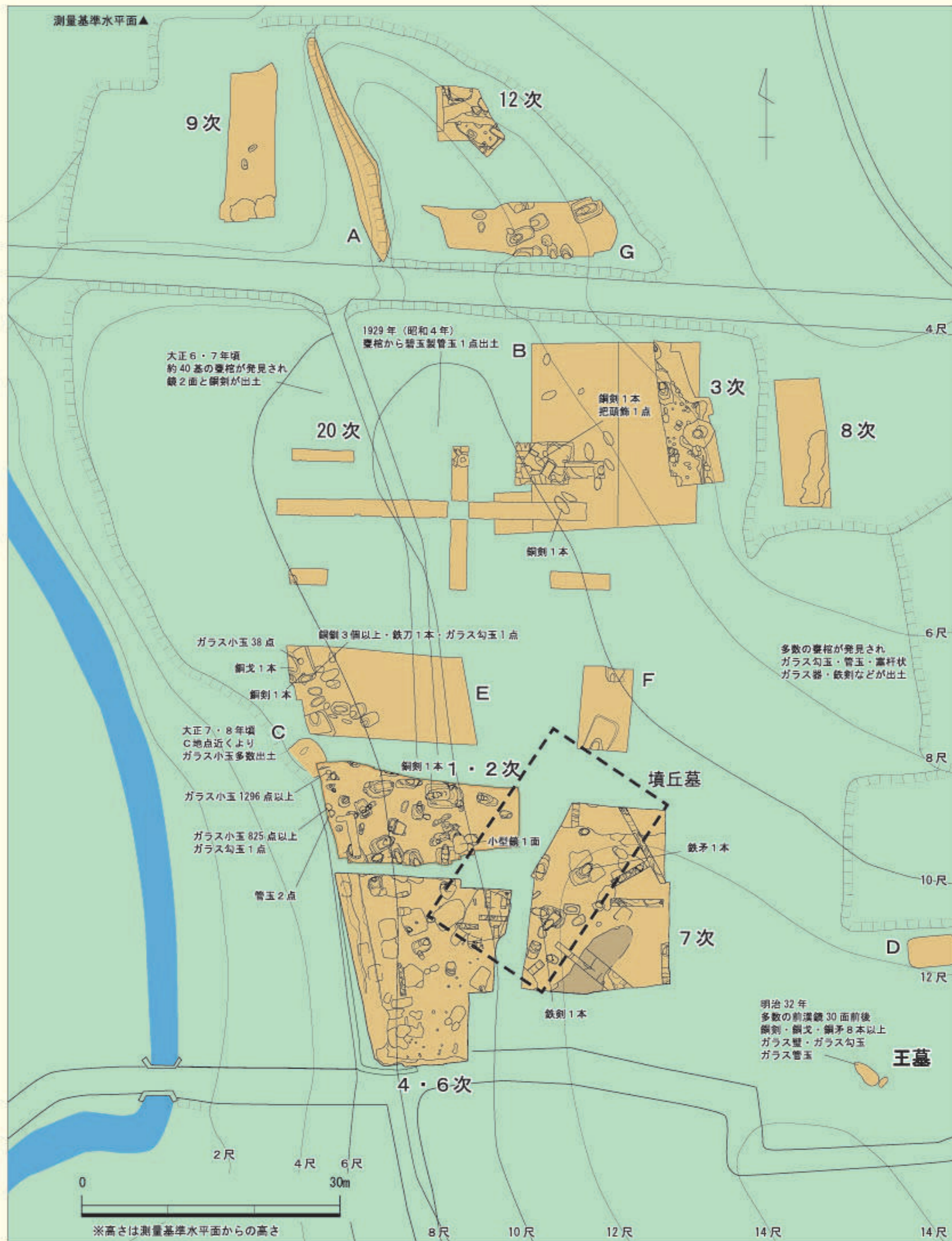
6次調査は、完全に発掘せず、遺構表面の観察を主体とした調査です。甕棺墓12基、土坑墓2基、他にも甕棺墓、土坑墓、木棺墓のいずれかと考えられる墓坑が21基あります。注目されるのは、1号墓坑です。規模は約5.7×4.5mの巨大な長方形で、甕棺墓か木棺墓と考えられます。1号墓坑は後期の墳墓の可能性があり、巨大な墓坑であることを考慮すれば、副葬品を持つ後期の王族墓かもしれません。

7次調査地は、周囲と比べても高まりなどはなく平坦な地形でしたが、5～6cm掘削すると明らかに周辺調査の状況とは異なり、人工的な盛土である墳丘の中に甕棺墓18基、土坑墓2基などが掘りこま

れていることが分かりました（墳丘墓）。上部が削られた甕棺墓などから考えれば、墳丘墓は今よりも1~1.5m高かったと推測されます。さらに、墳丘の裾部には全周しないものの溝が巡ることも明らかになりました。7次調査と周囲の調査成果から復元

すると墳丘の平面形は18×30m程度の長方形、裾部からの高さは2m以上あったと推測できます。

墳丘墓から出土した甕棺や土器から墳丘墓の造られた時期は、王墓よりやや古い中期後半だということが分かりました。この後、墳丘墓は後期まで埋葬



〔須玖岡本遺跡王墓・王族墓の調査地点と副葬品〕第11冊をもとに作成

- | | | |
|-------|----------------------------------|--------------------|
| A~D地点 | 京都帝国大学文学部考古学教室調査（昭和4年） | 春日市教育委員会調査 |
| E・F地点 | 九州大学文学部考古学研究室・福岡県教育委員会調査（昭和37年度） | 1・2次調査（昭和61・62年度） |
| G地点 | 福岡県教育委員会調査（昭和54年度） | 3次調査（昭和62年度） |
| | | 4・6次調査（昭和63・平成元年度） |
| | | 7次調査（平成2年度） |
| | | 8次調査（平成2年度） |
| | | 9次調査（平成3年度） |
| | | 12次調査（平成8年度） |
| | | 20次調査（平成26・27年度） |

須玖岡本遺跡王墓・王族墓の調査地点と副葬品



王族墓の副葬品

に使われたようです。

7・10・12号甕棺墓の棺内には朱が施され、7号甕棺墓の棺内から鉄剣、12号甕棺墓の棺外から鉄矛が出土しました。副葬品が出た甕棺墓の墓坑は、7次調査で最も大きなものでした。また、副葬品はありませんでしたが、10号甕棺墓の下甕は、須玖遺跡群では最大級のものです。これらの甕棺は王墓と同時期であり、破片しか残っていない王墓の甕棺を復元するときの参考になります。

20次調査地は、B地点と一部が重なります。1号甕棺墓は盗掘のせいか徹底的に破壊されていましたが、バラバラの破片を接合すると下甕はかなり復元できました。甕棺の特徴は、後期初頭のもので、破



最大級の墓坑を持つ20次4号甕棺墓



7次10号甕棺

片の中には朱が認められたものもあります。大正6・7年頃に、B地点の西側では約40個の甕棺と銅鏡2面、銅剣1本が出土していますが、現在、銅鏡2面は行方不明となっています。このうちの1面である方格規矩鏡は古式のもので、後期初頭と考えられます。これらのことから、後期初頭の銅鏡が出土した候補地は、1号甕棺墓である可能性があります。

4号甕棺墓は、墓坑が5.2×3.9mの規模で、中期前半の大甕を据えていました。甕棺墓の墓坑としては最大級のもので、甕棺内には銅剣、青銅製把頭飾が副葬され、赤色顔料（水銀朱）、その他青銅製品、歯なども出土しました。歯からは、被葬者が成年ということが分かっています。

2-3 まとめ

須玖岡本遺跡岡本地区に墳丘墓があったことは、7次調査で明らかになりました。また、奴国王墓も墳丘墓であったと考えられます。さらに、丘陵の西斜面、E地点や1・2次調査の西部は、副葬品を有する墳墓が多いことなどから未確認の墳丘墓が存在した可能性が高く、墳丘墓は複数並んでいた可能性があるのです。今後の調査により、別の墳丘墓や57年に金印を授かった奴国王の墳墓が見つかることが期待されます。

3-1 最先端技術でつくられた青銅器

弥生時代は、中国大陸や朝鮮半島から様々な物や技術がもたらされた時代でもありました。青銅器もその一つで、やがて国産化されます。ただし、青銅器生産は、原料の調達や工人の確保などが容易ではないため、有力な集落でしか行えませんでした。

ここでは、須玖岡本遺跡の青銅器生産について紹介します。

3-2 坂本地区－奴国の官営工房－

坂本地区は、春日丘陵北側の低地に立地します。平成2年度から6回の調査が行われ、青銅器工房跡や、夥しい数の青銅器生産に関連する遺物が出土し、工房域は3000㎡以上と推測できます。

青銅器工房は、掘立柱建物や竪穴住居の周囲に、直径約10×10mの溝が巡る建物です。周囲の溝は、建物の排水、除湿のために掘られたと考えられ、複数の工房が溝で連結しています。発掘調査からは、工房が何度も建て替えられ、周囲の溝も掘り直されたことが分かりました。

鋳型には銅矛、銅剣、銅戈、小形仿製鏡、小銅鐸、銅鏃などがあります。表裏に大きさの違う銅鏃が刻まれた連鋳式銅鏃鋳型は、一度に49個の銅鏃をつく



青銅器生産の復元図

ることができ、技術の高さを知ることができます。最も出土点数の多い銅矛中型は、折れた状態で出土するために長さ数cmですが、銅矛の鋒側から袋部、節帯部側の資料があります。鋳型、中型、その他の青銅器生産関連遺物の内訳は表のとおりです。

坂本地区では、弥生時代後期初頭～終末期の約200年間、銅矛を中心に青銅器がつくられました。初めは個人の権威の象徴や武器としてつくられた銅矛は、やがて共同体の祭器となりました。須玖遺跡群や周辺には、西方遺跡（中広形銅矛10本）須玖盤石遺跡（中広形銅矛9本）、岡本ノ辻遺跡（広形銅矛9本）、紅葉ヶ丘遺跡（中広形銅戈27本）、原町遺跡（中細～中広形銅戈48本）などの銅矛数本、銅戈数十本を



青銅器生産関連遺物

青銅器生産関連遺物	1・2次	3次	4次	5次	6次	計
石製鋳型	6	10	10	—	9	35
型のない鋳型石材等	21～	5～	19～	5～	25～	約75
銅矛中型	270～	80～	110～	12	25～	約500
小銅鐸中型	2	1	—	—	—	3
青銅製鋤先中型	4	1	—	1	—	6
埴埜	78～	19～	47～	2～	10～	約160
輸送風管	—	1	4	1	1	7
埴台	—	—	1	—	—	1
銅滓等	80～	20～	6～	1～	3	約110

表 坂本地区出土青銅器生産関連遺物

一度に埋めた一括埋納遺構が確認されています。坂本地区など須玖遺跡群でつくられた銅矛は、福岡平野だけでなく、九州、中・四国地域や対馬、朝鮮半島南部までもたらされたと考えられます。

須玖遺跡群の青銅器生産は、中期は集落の一角で行われましたが、後期頃には遠方まで銅矛を供給するために、青銅器生産体制を一括管理しやすいよう再編し、工房を計画的に配置する必要がありました。

こうしてつくられた青銅器工房群が、坂本地区だったと考えられます。さらにこれを補完するために、須玖永田A遺跡や須玖黒田遺跡などの坂本地区北側低地に青銅器工房が新たにつくられたと考えられます。

以上のように、須玖岡本遺跡坂本地区では、他の遺跡を圧倒する青銅器工房や青銅器生産関連遺物が出土します。ここで大量生産された青銅器は、遠方までもたらされ消費されました。青銅器を大量生産するためには、原材料や工人の継続的な確保が必要で、そこには奴国王の関与が推察されます。そのことが、須玖岡本遺跡坂本地区が、「奴国の官営工房」と称される所以です。



西方遺跡出土銅矛

3-3 岡本地区の青銅器工房の可能性

岡本地区5次調査では、工房は未確認ですが、鋳型類15点、銅矛中型21点、小銅鐸中型1点、埴埜／取瓶4点、銅滓1点が出土しました。複数の青銅



青銅器の一括埋納の想像図

器鋳造関連遺物が出土することから遠方から持ち込まれた可能性は低く、隣接地に青銅器工房が存在した可能性があります。

岡本地区23次調査で検出した中期後半の住居跡は、削平を受け検出面から床面までは数cmしかありませんでしたが、石製鋳型、中型や埴埜／取瓶が出土しました。特に破片で出土した鋳型は、一箇所に集中しており、小片5つが接合しました。その他の破片についても型の特徴や石材に残る調整痕、色調、風化の度合いから同一個体と考えられます。これらのことは鋳型が、他の遺構から持ち込まれたり、流れ込んだりしたものではなく、使ったものをその場に廃棄したことを示します。つまりこの住居跡は青銅器工房の可能性がります。

3-4 まとめ

青銅器の大量生産ができたのは、奴国王の関与を想定しましたが、王・王族の居住域の候補地は坂本地区北側の須玖坂本B遺跡を考えています。縁辺部の発掘調査しか行っていませんが、青銅器工房や海外からもたらされた遺物も出土しています。今後、王・王族の居宅などの特殊な建物や市場などの発見が期待されます。



須玖坂本B遺跡の復元図